

中国に見る教育改革

学校法人昌平黌 理事長

儒学文化研究所 所長

田久孝翁

私は去る十月七日～十一日の間、中国北京で開かれた孔子生誕二五五〇年記念祭に出席して中国の教育改革に対するテンポの早さに驚くばかりであった。

正に、「孔子は生きている」ということを実感した。ということは一九六〇～入〇年、この年代は中国共産党に於ける文化大革命が行われ、虚礼偶像廃止の名の許に各地の孔子廟が破壊され、その痕跡は今も各地に見ることが出来る。その中国が僅か三十五～六年にして今日の中国々民は孔子崇拜、孔子研究等が小、中、高、大学各段階で行われている。斯くして今回行われた人民大会場での国際儒連孔子生誕二五五〇年記念大会場に現れた小学生の一団約一〇〇名、四、五年生の論語朗読の姿である。参加十八ヶ国、約三〇〇名の出席者二同悉く嘆息の一瞬であった。大会二日目は参加各国代表による論文の発表に続いて、分科会に於けるディスカッションでは、中国の偉大なる指導者毛沢東にも誤りはあった、然してこれを改めることは良いことであり、文化人類の務めであると言う意見が会場に満ち満ちていた。

更に、中・高等教育の分野に於いても教育改革が行われ、法制化が進められている。正に、中国国民は古代文明に帰れ、「温故知新」が地で行く思いであった。曾て中国の歴史を繙くならば周末期、春秋戦国時代から二五五〇年、その間、孔子思想の撲滅運動なるものは前後合わせて二回、先ず第一は紀元前二一三年、秦の始皇帝による「焚書坑儒」の事件であり、二度目が前述の一九六〇年代の文化大革命であった。

然して是れは何れも三十五、六年の中で軌道の修正が図られているのである。これに比較して日本の今日の教育現場、現状は言語に絶するものである。

それが戦後五十五年を迎えた六・三・三制の教育であり、制度それ自体は別としても、問題は教育の中身である。六・三・三というこの年代は人間にとって唯一最大の成長期である。その時に当たり人間形成とは何か、即ち、修己治人、温故知新等々加えて長幼の序などと言う教養は全て教壇から抹殺されたのが六・三・三制教育の実体である。

仍て、来る今日の教育現場の実体は学級崩壊、青少年の凶悪犯罪の低年齢化、敢えて言うならばこれ等の現状は既に学校そのものの崩壊を意味している。管理能力を失った極言すれば死に体と化している。更に加えて家庭教育もまた然り、子を持つ親の教育それ自体の崩壊と言おうか、幼児の虐待、加えて殺人等々。これ等は全て我が国の戦後五十数年、

教育労働者と化した学校教育現場の責任であり、これを放任してきた政治の責任でなくて何であると言えるだろうか。

それに引換え、今日、中国の教育改革は目を見張るものがある。然も今日の中国は社会主義国家であるにも係わらず、誤りを改めるに何の拘りも無い。人口十三億とも四億とも言われる中国国民挙げての教育改革大合唱なのである。